

Living the Lotus 9

Buddhism in Everyday Life

2025
VOL. 240



立正佼成会 スリランカ教会

Living the Lotus Vol. 240 (September 2025)

【発行】立正佼成会 国際伝道部
〒166-8537
東京都杉並区和田2-7-1 普門メディアセンター3F
Tel: 03-5341-1124 Fax: 03-5341-1224
E-mail: iiving.the.lotus.rk-international@kosei-kai.or.jp
編集責任者: 赤川 恵一
編集チーフ: 三川 紗知
校閲者: 小坂 和正、菊池 克之
編集スタッフ: 国際伝道部スタッフ

立正佼成会は1938年に庭野日敬開祖、長沼妙佼脇祖によって創立された、法華三部経を所依の経典とする在家仏教教団です。家庭や職場、地域社会の中で釈尊の教えを生き、平和な世界を築いていきたいと願う人々の集まりです。現在は庭野日鏡会長とともに、私たち会員は仏教徒として布教伝道に励みながら、宗教界をはじめ各界の人々と手をたずさえ、国内外でさまざまな平和活動に取り組んでいます。

Living the Lotus—Buddhism in Everyday Life (法華経を生きる～生活の中の仏教) というタイトルには、日々の生活のなかに法華経の教えを活かして、泥水に咲く美しい蓮の花のように、人生を豊かに、そしてより価値あるものにしていきたいとの願いが込められています。本誌を通じて、世界中の人々に日々の生活のなかで活かす仏教の教えをお伝えします。

人生の秋から冬への備え

庭野日鑑
立正佼成会会長



去るものは去り、また充ちて

人生は、しばしば四季にたとえられます。命の芽が吹いて伸びる成長期は春、エネルギーにあふれ、社会で活躍する活動期は夏、人として成熟し、実りの秋を迎えて冬に備える収穫期は秋、人生の実りを得ておだやかにすごし、自身からこぼれ落ちた種が新たな春の芽吹きを待つ冬――。

人によってとらえ方は違うでしょうが、「人生百年時代」といわれる現在の考えからすると、春は二十五歳くらいまでで、夏はそれから五十歳まで、秋はそのさき七十五歳までをさして、それ以降が冬と見ていいと私は思っています。

ただ、この四季のなかで秋から冬にかけてのイメージは、あまりせいきはつらつ生氣潑瀾とはいえず、木の葉が枯れ落ち、風雪に耐える寒くて寂しい印象を重ねる人が多いと思います。

ところが、ちょうど同じ四つの区分で人生を分ける古代インドの「しじゅうき四住期」という考え方では、秋にあたる「りんじゅうき林住期」こそ人生のおうごんき黄金期であり、さまざまなしがらみに煩わされることなく、人生の最終ステージ（ゆぎょうき遊行期）を心豊かに楽しく生きるための準備ができる時期と教えています。

「去るものは去りまた充ちて秋の空」（いいだりゅうた飯田龍太）という句がありますが、人生の秋はそれまで煩わしいと感じていたことから少しずつ解放されて、心に充ちるものや期することを胸に、晴れやかな気持ちで冬へと向かう時期なのです。

ただ、生きていると、ときどき「あのときこうしておけばよかった」と悔いることがあり、とくに人生の後半には、そうした思いがわきがちです。しかしその悔恨や反省も、冬に向かうための確かな「実り」ではないかと思うのです。

秋に収穫される柿や栗も、渋やイガを嫌ってはいは糧になりませんが、豊かな実りとして受け入れ、手をかけることでおいしくいただけます。それと同じで、苦い思いも「収穫」して心の糧に変え、冬に向かうエネルギーにすることも、その時期にしか得られない大きな実りといえるでしょう。

冬は学びのとき

いまからおよそ二千六百年前、七十四歳で亡くなった孔子は、『論語』で「五十にして天命を知る。六十にして耳順う。七十にして心の欲するところに従えども矩を踰えず」と、自身の精神の歩みを語っています。人生の秋になると天地自然の道理を知るようになり、人の言葉を聞けばその理が心に通じて、冬の年代に入ったら心のままに行動しても自然と礼儀や規則を外れることがない——というのです。

私はもうすでに冬の年代のまっただ中にいるわけですが、人としてこれほど精熟した心境にはとても至りません。ただ、当時といまの平均寿命を考えると、孔子の七十歳はいまの百十歳くらい。八十代の私などまだまだ修養が足りなくて、知らないこと、わからないことがたくさんあって、その意味ではもっともっと学びたいと素直に思います。

こうした希求は、人間すべてに具わる本能のようなものです。しかも、学ぶ気持ちがあればいくつになっても新しいことに出会え、その喜びや感動は、生きる活力とともに人生の冬をすぞす楽しみをも与えてくれるのです。

そのためには健康も大切ですが、「長崎平和祈念像」で知られる彫刻家の北村西望氏が、数え年で百歳のときに、七十七歳の開祖さまと行なった対談で、健康長寿の秘訣を「腹を立てないこと。物事に対してクヨクヨ気につけないこと」と述べておられます。開祖さまが、それに加えて「嘘をつかないこと」と応じると「嘘をつかなければ心が洗われて健康によろしい」と返され、人から求められた書に「洗心長寿」と書くという日ごろのご姿勢を明かされています。

学びを深めようとつとめ、飾らず正直に——この姿勢は若い世代の手本になること必定ですが、学びを深めることについては、また稿をあらためてふれてみたいと思います。

(『佼成』2025年9月号)



南アフリカの人々の幸せのために仏さまの教えを伝えていきたい

イタリヤ・ローマ法座(南アフリカ在住) アンドリュー・クリスティ

立正佼成会には、いつごろ、どのような経緯で入会されたのですか？

私が立正佼成会に入会したのは2013年5月です。現在、私はアフリカ大陸の最南端に位置する南アフリカ共和国のヨハネスブルグに住んでいて、約20年間、日本のある仏教教団に入信していました。しかしある時、その教団の排他的で不寛容な考え方に疑念を抱き、徐々に足が遠のいてしまったのです。その後も仏教への関心を持ち続けていた私は、ある日、インターネットで立正佼成会のウェブサイトを目にして非常に感動したのです。それは光祥さまが東日本大震災の被災地を訪問され、復興への祈りとともに被災された人たちに寄り添い、励まされている献身的なお姿でした。そのニュースサイトを読んだ私は、すぐに日本の立正佼成会の本部に電話をしました。すると、残念ながら南アフリカには布教拠点がないとの回答だったのですが、ローマセンターを紹介され、水藻克年センター長さんと連絡を取り始めたのです。

その後、私はウェブサイトにあった英語經典のPDFをダウンロードして、朝夕のご供養を実践し始めました。また同じウェブサイト上の開祖さまの著書『法華經の新しい解釈』や『見えないまつげ』がダウンロードできたので読み始め、さらに電子書籍でも会長先生の著書『心田を耕す』、光祥さまの著書『開祖さまに倣いて』などを購入して、立正佼成会に対する理解を少しずつ深めていきました。

ローマセンターとは、その後どのようにつながりを持ったのですか？

ローマセンターが実施しているオンラインプログラムに参加して、会長先生の毎月の『佼成』のご法話をサンガの皆さんと輪読し、ディスカッションをしたり、またある時は、皆さんの体験説法を聞いたあと法座を行ない、お互いに感想を語り合ってきました。そうした活動に参加を続



アンドリュー・クリスティさん

けている中、2013年12月に水藻センター長さんがヨハネスブルグの自宅まで来て、教会勧請御本尊を安置してください、私は感謝と感動で胸が熱くなりました。この安置式には、うれしいことに母や姉たち約10人が参加してくれました。92歳で亡くなった母は生前、私と一緒に暮らしていました。母はクリスチャンでしたが、なぜか私が立正佼成会の信仰をすることを喜んでくれ、コロナ禍のころはオンラインでのプログラムも多かったので、研修や法座を興味深く聞いていて、終わったあと私にいろいろと感想を語ってくれました。

立正佼成会のどういうところに魅力を感じますか？

立正佼成会のいちばんの魅力は、とても寛容な教団であることです。異なる価値観や異なる宗教に理解を示して、いわば違いを超えて共通点を見いだしている点が素晴らしいと思っています。立正佼成会が現在、国内外

Interview

で熱心に宗教対話や宗教協力を推し進めている点においても非常に寛容的であると言えます。

それから読経供養を基本の修行にしているところですね。私は朝夕のご供養をととても大事にしている、毎日、英訳『法華三部経』の一品を必ず入れて、ご供養をしているのですが、とても心が穏やかな気持ちになります。特に朝のご供養は出勤前ですので、強い意志と信念を持って一日のスタートを切ることができます。また、ご供養を実践することで、どうしたら友人や知人と良い関係が築けるか智慧を頂けること、何事に対してもチャレンジする姿勢で取り組むこと、自分を深く内省することなど、たくさんの功德を頂いていることを実感しています。

立正佼成会の教えでとくに大切にしていることはありますか？

私は会長先生の毎月の『佼成』のご法話をタブレットにダウンロードして毎日、朝夕くり返し読むように心がけています。朝のご供養のあとには会長先生のご法話を読み、そして会社から帰宅後、夜のご供養のあとに開祖さまのご法話を読むことが今では日々の習慣になっています。最近で言えば、会長先生が「心田を耕す」ことの大切さを述べ、「智慧が私の犁であり、恥じることが轆である」という詩をもって私たち会員にくり返し心を耕していく重要性をお示しくださったことが印象に残っています。私にとって開祖さま、会長先生のご法話は日ごろの自分を省み、精進するうえで欠かせない人生の指針になっています。

2024年に立正佼成会本部を訪問された目的を教えてください。

私は現在、ヨハネスブルグで暮らしていて、これまでローマセンターのオンラインでの活動しかできなかったこともあり、立正佼成会の本部で研修や法座修行などを対面で学び、実際に体験すること、そして本部勧請御本尊を拝受することが最も大きな目的でした。仏教は自分が実践するだけでなく、より多くの人に教えを伝え、みんなが共に幸せになることを目的としていると思っています。ですから帰国後は本部での学びを生かして、勇気と

自信を持って仏さまの教えを広めたいということ強く決意しました。

日程としては10月中旬から約2週間、個人参拝のかたちで立正佼成会の本部を訪れました。具体的には大聖堂をはじめ本部諸施設の見学、新潟県十日町市の開祖さまの生誕地参拝、立正佼成会国際アドバイザーのドミニク・スカランジェロ博士による仏教と法華経の講義の聴講、練馬教会での儀式研修(鐘・木鉦の作法の習得)や布教実習など、貴重な経験をしました。また練馬教会の皆さんと一緒に本部のお会式・一乗まつりに参加させていただくこともできました。とにかく訪日中、私はスポンジが水を吸収するようにあらゆる縁から学びたいという気持ちでいっぱいでした。また、帰国直前の10月27日には赤川恵一国際伝道部長さんから、御像御本尊を拝受するという有り難いはからいをいただき、さらに11月2日には水藻センター長さんが再びヨハネスブルグの自宅に来られ、御像の安置式を執り行なってくださったのです。

クリスティーさんは南アフリカにおけるご法の一粒種だと思えます。最後に今後の修行目標、さらに将来に向けての夢を聞かせてください。

私の今の個人的な目標は、エゴや怒りをなくして寛容な人間になりたいということです。日ごろの人間関係で



赤川恵一国際伝道部長から御本尊を拝受するクリスティーさん

言えば、人の意見を否定したり、自分の感情のままに人を責めたり、怒ったりしないことです。どんな人に対しても分け隔てなく接する広い心を持って相手の言動を受け入れ、一緒にいると安心できるような心穏やかな人になりたいですね。それは理想かもしれませんが、それこそが仏教の教える眼目だと私は信じていますので、今以上に仏教や法華経を学び修行を重ね、精進していきたいと思っています。

また、立正佼成会の会員としては、今後もこの素晴らしい教えをより多くの人々にお伝えしていき、近い将来、南アフリカに佼成会のサンガを形成することができたらと

いう目標を抱いています。もし可能であるならば、自宅を南アフリカの布教拠点として使用してもらい、研修や法座修行などを開いていただければ有り難いと思っています。南アフリカは1994年にアパルトヘイト(人種隔離政策)が撤廃されましたが、過去の歴史的な背景や影響で現在も貧困や治安の悪化、高い失業率など大きな課題を抱え、たくさんの方が苦しんでいるのが現状です。そのような状況ですが、私は仏教が国や社会を変革する力になると思っています。そして立正佼成会の教えが、この国と社会の平和と調和のために大きなインパクトを与えることができると確信しています。



お会式・一乗まつりに参加するクリスティーさん(中央奥)



まんが立正佼成会入門



立正佼成会の施設

おうめれんせい 青梅練成道場 ・ せいたんち 生誕地道場

青年部員の研修施設として1966年（昭和41年）、東京都青梅市に完成した青梅練成道場。緑に囲まれた広大な土地には二つの研修棟、陸上競技場、野球場などがあります。現在は、あらゆる会員に研修の場所として利用されています。

生誕地道場は、開祖さまの生誕地・新潟県十日町市菅沼に1978年（昭和53年）に建てられた、生誕地参拝の拠点です。近くには、復元された開祖さまのご生家があります。



豆知識

ご生家は、2006年（平成18年）に「開祖生誕100年」の記念事業として復元された。菅沼に行く時にはおとずれて、当時の開祖さまの生活をしのんでみよう。



『まんが立正佼成会入門』は、佼成ショップにて好評発売中です。
<https://www.koseishop.com/>

国内外に広がる教会道場

すべての人がいつでも、どこでも、身近なところで法華經の教えが学べるようにと、全国に教会道場や地域道場が置かれています。

また、アメリカ、ブラジル、イギリス、台湾、タイ、スリランカ、インド、ネパール、バングラデシュ、

韓国などにも教会道場や拠点が置かれています。

教会道場は式典、研修会、練成会などを行なうだけでなく、悩みや困っていることを解決する場所でもあります。布薩の日や休日には参拝に出かけましょう。



豆知識

ご供養の時に読み上げる前唱に「道場観」がある。ここには家庭、学校など生活の場すべてが修行の場だと説かれている。でも、それを実践することはとてもむずかしい。だから、教会道場が必要なのだ。



仏さまのような気持ちで

身近な一人を救う

立正佼成会開祖 庭野日敬

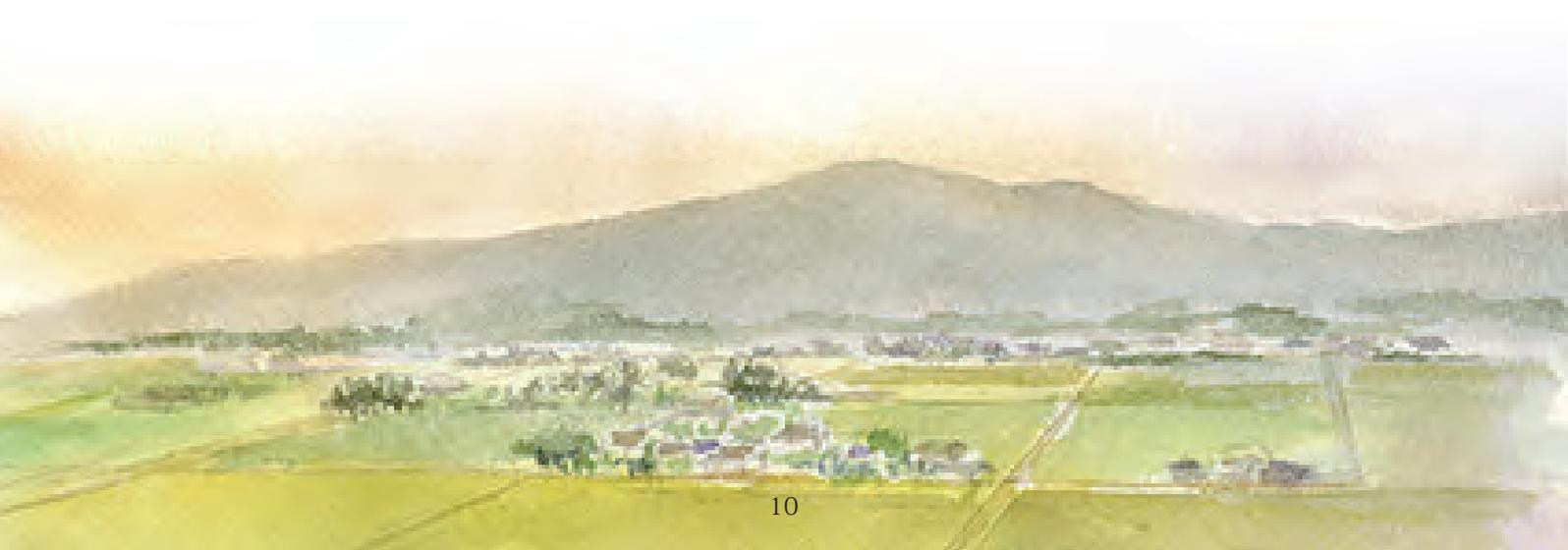


そのためにも、やはり身近な一人ひとりを、悩み苦しみからお救いすることが第一となります。人びとを「貧・病・争」から救ったのは草創期のことだと考える人もいるでしょうが、現在でも新しい形の「貧・病・争」が数多く生まれています。

ですから、法華経を繰り返し読誦し、解説書を読み返し、その真実を身につけることによって、時々刻々に変化する世の中の情勢を見極めることのできる智慧をいただかなければなりません。そうでなくては、接する一人ひとりの悩み苦しきも理解できず、したがってそれに適応する「方便」も湧いてはこないのです。

最後にお話ししておきたいのは、みなさんが説かれる仏法が、その場においてすぐに歴然とした結果を生じなくても、それは相手の心の奥に貴重な種をまいたものと心得てほしい、ということです。まかれた種は、いつか、何かの機会に必ず芽を吹くのです。それを信じて、臆することなく、倦むことなく、菩薩行に挺身されることを切に願ってやみません。

庭野日敬平成法話集 1 『菩提の萌を発さしむ』 P.83-84



四住期に学ぶ、心豊かな生き方

国際伝道部長
赤川 恵一

皆さん、こんにちは。日本では昔から「暑さ寒さも彼岸まで」と言われる通り、いまだ残暑の厳しい毎日ですが、ときおり頬をなでる涼しい風に、確かな季節の移ろいを感じるこの頃です。皆さん、お変わりなくお過ごしでしょうか。

会長先生は今月のご法話で、人生を四季にたとえながら、やはり人の一生を4つの時期に分け、心豊かに生きることを説く古代インドの「四住期」という考え方をご紹介くださいました。私がこの人生哲学を知ったのは、五木寛之氏の著書『林住期』を読んだ40代の頃にさかのぼります。人生を学生期、家住期、林住期、遊行期の4つのステージに分け、それぞれの規範に即した生き方を説く教えを、現代社会で言葉通りに実践するのは肉体的にも経済的にも難しいと感じつつも、「精神的四住期」ならば可能かもしれないと考えたことを思い出します。もし現実にそのように生きられたなら、自由自在の境地を楽しめることでしょう。

会長先生は林住期にあたる人生の秋について、「それまで煩わしいと感じていたことから少しずつ解放されて、心に充ちるものや期することを胸に、晴れやかな気持ちで冬へと向かう時期」と教えてくださっています。春夏秋冬のそれぞれに得難い実りがあるように、不足の心から信心を見失わぬよう、「今は過去からの果報であり、今が未来を創る」という真理を胸に、今月も謙虚と感謝の心で精進を重ねてまいりたいと思います。



8月2日、「東アジア幹部教育」の本部集合研修に参加した韓国、モンゴルのリーダーと。今年は台南教会も参加して3回にわたりオンラインで研修が実施され、4回目は本部で集合研修が行なわれた。



一食を捧げる運動

Donate-a-Meal Movement



こころがよろこぶ。



「一食を捧げる運動」の日本語ウェブサイト。精神、概要、支援している団体からの情報、現地の声、ボランティア活動の様子など、さまざまな情報を掲載しております。

「一食を捧げる運動」とは

「一食を捧げる運動」とは、世界各地で起きている紛争や災害、貧困などで苦しむ人々に思いをはせ、食事や趣味に使う自分にとって必要なお金から献金し支援活動に役立てる、わかちあいの運動です。

1975年に日本で「月に数回一食を抜き、その分を献金する」というスタイルで始まった同運動ですが、今では、それぞれのライフスタイルに合わせ、世界各地で様々な実践がされています。今月号と来月号では、実践する世界のサンガの声をご紹介します。



圭代 ウイカースキーさん
ニューヨーク教会フロリダ地区

お孫さんと

私は毎週日曜日に朝食を抜いて、2ドル一食運動の箱に入れていきます。そして一年に一回まとめてニューヨーク教会にお布施させていただいています。なぜ2ドルかというと、毎週行なわれるフロリダ州の宝くじのチケットが一枚2ドルなので、それを買う代わりにその代金を一週間に一回一食運動の箱に献金しているからです。

2016年の11月にニューヨーク教会の杉野有里総務部長さんが一食運動の研修をしてくださいました。それまでは、一食運動は思い出した時にしかしていませんでしたが、少しでも続けてやってみようという気持ちになりました。その時は、私自身経済的に苦しい時期でしたので、現金がない時は紙に「\$2」と日付を書いておき、現金が入った時に箱の中にお金を入れるようにしていました。家族もコインを見つけた時や、お釣りなどがあるとすぐに一食運動の箱に入れてくれ

るようになりました。家族が協力してくれるようになったことがとても有り難いです。

一食運動をさせていただきながら、自分の生活習慣を見直し、お金と物を大切に使う事ができるようになりました。



メアリー・トレシー・シグマンさん
ニューヨーク教会フォートマイヤーズグループ

なぜ一食実践が私にとって大切なのか

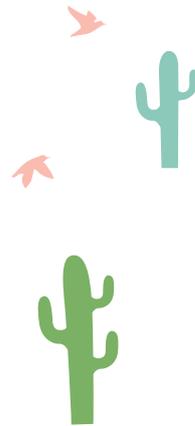
多くの皆さんと同じように、私も教会のリーダーの一人から「一食を捧げる運動」の献金箱を渡され、その箱に食事代を寄付する実践を習慣にすることを教えていただきました。理想的には、一食分を実際に食べないことで、本当に食べ物がない人が感じている空腹の苦しみを、ほんの少しでも自分の身で感じる事ができればと思います。



時にはそのような実践ができることもありましたが、たいいていは月末に「一食を捧げる運動」の献金箱にお金を入れるだけでした。募金を始めたのは、立正佼成会一食平和基金が世界中の危機の中で、素晴らしい人道的活動をしていることを知っていたので、それを支援したかったからです。

2022年、私たちの家はフロリダを襲ったハリケーン「イアン」によって壊滅的な被害を受けました。停電が復旧するまで何日もかかり、復旧しても使える調理器具は電子レンジだけでした。結局、私たちは数週間、冷たい豆やツナ缶、ピーナッツバターなどを食べて過ごしました。夫も私も体重が落ちてしまいましたが、それでも生きていること、家を建て直す場所や住む場所があることをとても有り難いと思えました。初めて食事が食べられない苦しみを僅かながらも体験し、疎外されている人々の苦しみを感しました。私たちはいつも相互につながり、関係し合っているのだと、頭では理解していましたが、今はそのことを心で感じるができます。復旧が始まったころ、親しくしているご近所の皆さんが私たちを助けてくださり、夕食に招いてくださったあの晩のことは決して忘れません。数週間ぶりに頂いた手料理は本当に美味しく、食べ物とのつながりを感じられたこの感覚を決して忘れまいと誓いました。

そして現在、毎月立正佼成会一食平和基金に寄付をするときは、心を込めて実践をしています。食事を抜くのを忘れてしまう月があっても、自分がその月にしっかり食事をとれていたことを忘れないようにし、食べるものがない人々を助けてあげたいと思います。立正佼成会の「一食を捧げる運動」を通じて、毎月、困難な状況の中で懸命に生きているすべての人々とのつながりに気づかせていただけることは、私にとって幸運なことであり、とてもありがたいことです。



ケビン・ロシェイ教会長
サンアントニオ教会

私たちが継続して取り組んでいる「一食を捧げる運動」の支援と、真心からの実践について、皆さまと共有できることを嬉しく思います。この運動は、私たちの住む地域に思いやりの心を育み、行動へとつなげてくれる大切な取り組みです。

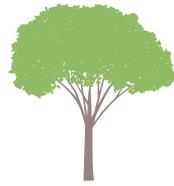
南テキサスで暮らす私たちは、異常気象や、経済的な困窮、移民の方々が抱える不安定な状況、そして新鮮で栄養のある食べ物が手に入りにくいことなど、多くの家庭が直面している様々な課題を実感しています。このような状況の中で、サンアントニオ・フードバンクへの寄付は、地元の人々を支え、地域の絆を強める大切な方法です。たった一つの分かち合いの行動、それが缶詰一つの寄付であっても、数時間のボランティア活動であっても、心のこもった食事の提供であっても、その一つひとつが、飢えに苦しむ家族を支える力になります。そうすることで、たとえ困難な時期でも、思いやりの心が地域や家庭でしっかりと育ち、広がっていくことに、私たちは気づくことができるのです。

毎年、サンアントニオ教会では、「一食を捧げる運動」の精神に基づき、サンアントニオ・フードバンクへの食料品の寄付を呼びかけるキャンペーンを行なっています。会員の皆さまの真心からの支援のおかげさまで、長期保存が可能な食品が大きな箱いっぱい集まります。この寄付は、食べ物に困っている地域の人々やご家庭への支えとなっています。



一食を捧げる運動

Donate-a-Meal Movement



私たちのこの活動への思いは、コロナ禍の中で一層深まりました。大変だった時期に、サンアントニオ教会の会員たちは、サンアントニオ・フードバンクが支援する地元の農場でのボランティア活動に参加しました。そこで土に触れ、苗を植えたり肥料をまいたりしながら、野菜の手入れを真心をこめて手伝いました。この活動は、新鮮な野菜や果物を必要な方々に届けるだけでなく、私たち自身が大地や仲間とのつながりを深める機縁にもなりました。

毎月、サンアントニオ教会は、同フードバンクに100ドル(約14,000円)を寄付し、地域の方々に栄養のある食料を届ける活動を支援しています。

また、教会サンガ全体で食事会や行事が行なわれた後には、余った料理を、食べ物に困っている会員の方々にお渡ししています。

こうした取り組みは、私たちの信仰の中心にある「人さまの苦しみを和らげるため、できる限り行動を通じて思いやりの心を体現する」という教えに根ざしています。立正佼成会のビジョンに啓発され実践する世界サンガの一員であることに、私たちは心から感謝しています。これからも、世界の仲間たちと手を取り合いながら、この活動を続けていきたいと願っています。

心より感謝を込めて



グレアム・カッティングさん、アキバ・ユナさん
ロンドンセンター



私たちが「一食を捧げる運動」を初めて知ったのは、ロンドン法座に参加したときでした。そのすぐ後に、ユナがこの実践を呼びかけるお役を任され、しばらくの間、担当していました。それ以来、私たちは「一食を捧げる運動」を、仏教の大切な教えのひとつである六波羅蜜の布施行の実践として、日々の生活の中で続けてまいりました。もちろん、この実践には、献金をするだけでなく、月に2日、少なくとも一食を抜くことも含まれており、私たちもできる限りその実践に努めています。ただ、どのようなときでも、私たちは必ず「一食を捧げる運動」の募金箱に寄付をすることを忘れません。私たちは家の中でも目立つ場所にこの募金箱を置いています。

短い断食は、たとえごくわずかな時間であっても、空腹とはどういうものかということに意識を向けさせてくれます。しかしもちろん、それは真に困窮している方々が日々感じている飢えとは全く比べものになりません。ただ、そのわずかな空腹の体験を通して、自分たちがいかに恵まれているかを改めて実感することができ、日々の生活の中で「布施」「共感」「感謝」の心を忘れずにいようとする姿勢につながっているように感じます。

また、この運動のもうひとつの大きな意義は、実践を通じて寄せられた献金が、迅速かつ効率的に届けられているという点です。この運動に関わるネットワークは、飢餓に苦しむ地域や地震の被災地、紛争地域をはじめとする世界の緊急支援を必要とする場所に、即時に支援を届けるための非常に優れた仕組みを備えています。また、数年間ネパールに住んでいた経験から、私たちは多くの人々が自立して生きていくためには、具体的な支援が不可欠であることを、身をもって感じてきました。そうした背景から、「一食を捧げる運動」の理念には自然と共感を覚えています。

六波羅蜜の中でも最も大切な実践のひとつである布施の精神を、「一食を捧げる運動」を通じて日々の生活の中で実践しながら、周りにもその輪を広げていけるよう願っています。そして、世界の平和を願い、皆さまと共に祈りを捧げていきたいと思えます。

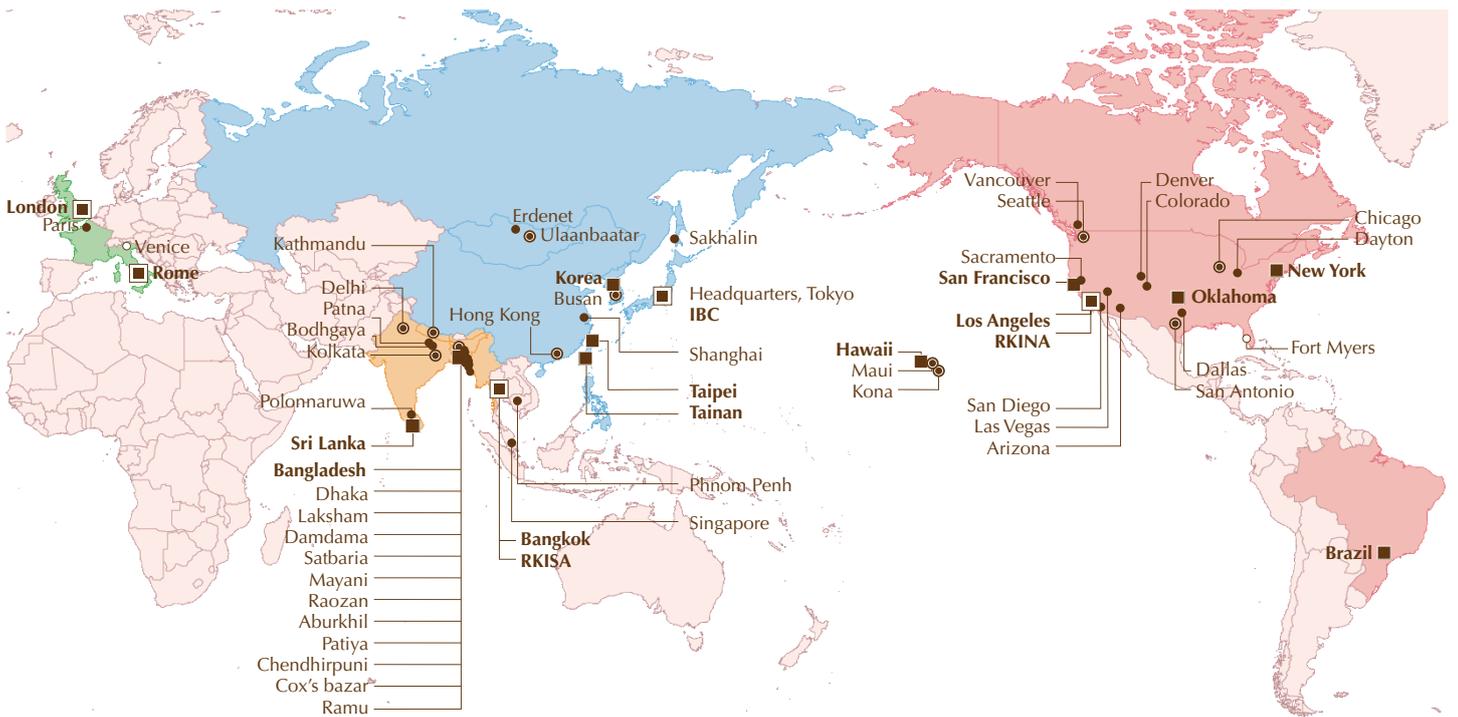


Rissho Kosei-kai International

Make Every Encounter Matter



🌸 A Global Buddhist Movement 🌸



Information about local Dharma centers



facebook



X



✉ We welcome comments on our newsletter *Living the Lotus*: living.the.lotus.rk-international@kosei-kai.or.jp